

原始仏典における無記説について

荻 田 通 俊

仏教では、思想界における議論の対象であった種々の課題に対して、無記 (avyākata) の立場を採る。世界は常住か無常かといった問題に対して、仏陀はそれらに答えることは無益であるとして、肯定も否定もせず、解答しなかったのである。

パリ仏典中に散見される無記説において、そこに取り上げられる問いの種類は様々であるが、最も一般的なものが、世界 (loka) の常住・無常、世界の有限・無限、靈魂と身体の同一・別異、taṭhagata の死後の存在の四類十問から成る十無記である。これら十無記で問われる諸課題は、外道の主張を包括したものと考えて差し支えなく、パリ仏典では、それらを無記として退けた後に、四聖諦のような根本思想や仏教の基本的な立場が示される場合が多い。

この無記が説かれる場面には、仏陀自身が諸比丘に説法する場合、仏弟子が仏陀に質問する場合等様々な形式が見られるが、その多くに遊行者 (paribbajaka) が関わっている点は見逃せない。

ところで、この仏陀の無記説と同じように、絶対論の立場を回避した思想が外教の主張の中にも見られる。ここでは、無記の立場にある仏教が、類似した主張を唱える外教思想についていかに対処し、克服していったかという点に注目したい。

『沙門果経』(Samaññaphala-sutta; DN, No. 2) において紹介される六師外道の一人サンジャヤ・ヴェーラッティPUTTA (Sa-

jaya Belatthiputta) は、他世 (para loka)、化生の有情 (satta opapātika)、善悪業の異熟果 (sukata-dukkatāṇam kammāṇaṃ phalaṃ vipāka) 、taṭhagata の死後の存在の有無といった課題に対して、執拗に確答を避けている (DN, Vol. I, pp. 58-59)。これは、どの命題についても正しく知り得ないとして、徹底して否定的に捉えるところにその特徴がある。サンジャヤは、一面的な判断に固執することを避け、一切の判断の中止を唱えたのである。このサンジャヤの説と十無記の間には、各々で取り上げられる課題に相違が見られる。即ちサンジャヤ説に見られる四つの課題と十無記に現れる四類十問とは、taṭhagata の死後の存在のみが共通で、他は異なる課題を扱っている。サンジャヤ説に見られる他世、化生の有情、善悪業の異熟果の三つの課題は、実は Payasi-sutta (DN, No. 23) でも問題とされている。ものの存在や価値を一切認めない断滅論を主張する王族パーヤシ (Payasi) に対して、仏弟子のクマラー・カッサバ (Kumārakassapa) がそれとは逆にこれらの諸課題を肯定する論を唱える (DN, Vol. II, p. 319)。つまり仏教の立場としては、他世、化生の有情、善悪業の異熟果の存在を認めているのである。

また、サンジャヤと同じ六師外道の一人であるアジタ・ケーサカンバリン (Ajita Kesakambalin) は、先のパーヤシと同じく断滅論の立場にある思想家である。彼は他世、化生の有情、善悪業の異熟果を含む十種の課題についてその意義、存在を否定しているが、パリ仏典中にはこれと対になって、全く反対に十種の課題について意義、存在を肯定する説が、仏説として数多く認められる (MN, Vol. I, p. 402 etc)。これは、道徳や努力を否定する断滅論と常に対になって現れることから、逆に倫理面、道徳面

を肯定する仏教側の趣旨が根底にあったと考えられよう。

以上から、十無記とサンジャヤ説で取り上げられる課題が異なる背景には、両者の立場の類似による誤解を回避する目的があったと考えられる。經典の作者は、善悪業の異熟果など仏教が肯定する課題をサンジャヤ説に混在させることにより、サンジャヤの立場と仏陀の立場との相違を明確にしたのではないかと推測される。

次に、仏教と共に非正統派バラモン系思想の主流を占めたジャイナ教の思想について考えたい。先述した仏教の十無記で取り上げられる諸課題に対して、ジャイナ教では、偏った見方に陥らず、多角的に捉えようとする態度が見られる。特に世界の有限・無限に関する問いについては、実体 (dava) 、空間 (khetta) 、時間 (kala) 、状態 (bhava) という四つの観点から相対的に判断するジャイナ教独特の考察方法で対処している (Vij. 2-1, Jaina-agama-series Vol. 4-1, pp. 82-83)。このようなジャイナ教の立場は、様々な観点から事物を見ることによって、対立するどの命題においても真実の可能性を考え、矛盾した概念の共存を認めていると言える。ジャイナ教では、世界の常住・無常といった諸々の課題に対して、一面的なものの見方をするのではなく、相対主義の立場から判断を下しているのである。

では、こうしたジャイナ教の考え方に對する仏教側の批判はどうであろうか。ここで注目すべき資料として、Udana における象と盲人の喩えを取り上げたい。それは、サーヴァッティーの王が、生まれながらの盲目の人々に、各々象の身体の異なった部分を触らせたと、象の鼻に触った人は象を鋤の柄のようなものだと言ひ、象の脚に触った人は象を柱のようなものだとして、互いに言い争うという内容である。この比喩は、十無記に見られる

ような諸課題に対して、外道の者たちが自説を譲らずに論争している様子を喩えているものである (Ud. 6-4: Ud. pp. 68-69)。

この象と盲人の喩えは、ジャイナ教の多面的な觀察法を想起させよう。ジャイナ教の判断形式によれば、部分的には彼ら盲目の人々の解釈は誤りではないし、象の実態を正しく表現していることに変わりはない。ところが、ここでの仏教の立場は、象を部分的に捉えても象全体即ち物事の真実を正確に捉えたことにはならないというものである。種々の概念の共存を主張するジャイナ教は、確かにひとつの立場に固執することはない。しかしながら、ジャイナ教の立場では部分的な真実の把握に留まっており、真実全体を捉えたことにはならないという、仏教側からの批判がこの比喩では示されているのではないだろうか。絶対的な立場を否定する仏教は、ここで相対主義をも超越したのである。

注

- ① 石上善応「無記説とバリバージャカ」〔佐藤博士古稀記念 佛教思想論叢〕、山喜房仏書林、一九七二、p. 3ff.)
- ② 拙稿「仏教興起時代の思想家と形而上学的課題—サンジャヤ、仏教、ジャナイ教を比較して—」〔大谷大学大学院研究紀要〕第七号(一九九〇) pp. 30-31, Bimal Krishna Matilal, The Central Philosophy of Jainism (Anekantavāda), L. D. Series 79, Ahmedabad, 1981, pp. 20-21.

【略号】

- DN. Digha-nikāya MN. Majjhima-nikāya
Ud. Udana Vij. Vyāharaṇṇatti
* バリー仏典の頁は PTS 版による。